

韓国語-eci 構文における可能用法の意味記述

—その使役的性質の観点から—

鄭宇鎮

woojin3229@gmail.com

キーワード：韓国語 -eci 構文 使役事象 捉え方 可能

要旨

韓国語における-eci 構文は、動詞や形容詞に-eci が後接したものであり、受身、非意図、可能、状態変化という大きく分けて4つの用法を持つとされる。本稿では、使役事象の捉え方 (construal) に注目し、可能用法の詳細な意味記述を行う。具体的には、-eci 構文の可能用法は、当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられ、予想に反する事象展開の原因となる対象の属性を語るものであることを示す。この分析は、-eci 構文の受身用法との意味的關係を明らかにするだけでなく、他言語の対応する構文との意味的關係も適切に捉えることができるものである。

1. はじめに

韓国語には、動詞や形容詞に-eci が後接し様々な意味を表す多義的な構文 (以下、-eci 構文) がある¹。形容詞に-eci が後接すると形容詞が表す状態への変化を意味し、他動詞に後接する場合は受身用法だけでなく非意図 (あるいは自発) 用法や可能用法を持つとされている。後者の2つの用法は、受身用法と異なり、自動詞であっても意図的な行為を表す場合であれば後接可能である。

(1) 受身用法

i yoli=nun yumyenghan yolisa=ey.uhyay mantul-ecy-ess-ta
この 料理=TOP 有名な シェフ=によって 作る-eci-PST-DEC²
「この料理は有名なシェフによって作られた。」

¹ *ekul(u)-eci-ta* (ずれる) のように-eci が後接する動詞 (*ekulu-*) が少なくとも現代韓国語においては単独で用いられない場合や、*pwul-eci-ta* (折れる) のように、全体の意味が動詞 *pwul-* (吹く) と-eci の意味の組み合わせから予測することが困難である場合は、-eci 構文としての分析可能性が下がり、慣習的な意味を獲得していると考えられるため、本稿の分析対象からは外すことにする。

² 略号は以下のとおりである。ACC (対格)、A.HON (聞き手丁寧)、DAT (与格)、DEC (叙述)、DRCT (方向格)、INS (道具/手段格)、IPFV (未完了)、LOC (場所格)、MIR (意外)、NEG (否定)、NOM (主格)、PASS (受身)、POT (可能)、PRS (現在)、PST (過去)、TOP (主題)

(2) 非意図（自発）用法

- a. to=lul chilyeko hayssnuntey ley=ka chy-**ecy**-ess-ta (円山 2007: 57)
 ド=ACC 弾こうと したのに レ=NOM 弾く -eci-PST-DEC
 「ドを弾こうとしたのにレを弾いてしまった。」
- b. colepulhakonani sensayngnim tayk=ey cal k(a)-**aci**-ci.anh-nun-ta
 卒業してから 先生 お宅=DAT あまり 行く -eci-NEG-PRS-DEC
 「卒業してから、先生のお宅にあまり行かなくなる。」 (Lee and Chae 1999: 300)

(3) 可能用法

- a. kwulttwuk=i mak-**acy**-ess-ta (Lee 1978: 35)
 煙突=NOM ふさぐ -eci-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突がふさがった。」
- b. elumphan wi=ey s(e)-**ecy**-ess-ta (Lee 1978: 53)
 氷 上=LOC 立つ -eci-PST-DEC
 「(話し手が、なんとか) 氷の上に立つことができた。」

(4) 状態変化用法

- mwulka=ka noph-**acy**-ess-ta
 物価=NOM 高い -eci-PST-DEC
 「物価が高くなった。」

-eci 構文に関する先行研究では、以上のような、1つの文法形式が複数の意味を表すという特徴に注目が集まり、諸用法に共通する抽象的な意味（《被動性》^{3 4} (Kitamura 1999)、《状態変化》(Jun 2008)）や複数の用法のうち基本となる用法を設定しようとする試み（e.g. Bae 1988、Woo1997）が行われてきた。

本稿では、-eci 構文の用法のうち可能用法を分析対象とする。可能用法については、事象の成立の難しさを表すという分析 (Lee 1978, 1993) や、話し手の発揮しうる潜在的能力 (Bak 2007) や当該事象の生じる可能性を表すという分析 (Bae 1988、Son1996)、受身用法を -eci 構文の基本となる用法として認定したうえで、可能用法はその基本的な意味に特定の文脈情報が加わることによって生じるとする分析 (Lee 2004、Park 2017) などがある。しかしながら、先行研究で指摘されている、事象の成立の難しさや話し手の潜在的能力は、可能用法の意味の一部に過ぎず、十分な分析とは言い難い。また、そうした意味的特徴が、可能用法の持つ様々な特徴（例えば、被動者（行為の受け手）だけでなく道具も主格で標示されることや、行為者が明示されないこと、意図的な行為を表す自動詞にも後接することなど）とどのように関連しているのかについて適切な説明を与えていない。

本稿では、使役事象の捉え方（cf. 西村 1998、Shibatani 2006、Langacker 2008）に注目し、

³ 「主語とは別の何かが原因となって主語が状態変化を被ること」(Kitamura 1999: 335)

⁴ 以下、先行研究で用いられた用語をそのまま引用する際は《》で示す。

-eci 構文の可能用法は、当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられ、予想に反する事象展開の原因となる対象の属性を語るものであることを示す。

以下、第2節では先行研究を概観し、第3節では受身用法との意味的關係を中心に可能用法の意味を記述する。第4節では他言語の対応する構文との意味的関連について検討する。

2. 先行研究

-eci 構文が表す意味と形態的受身形式-*i*/hi/li/ki- (以下、-*i*-系) が表す意味との違いに注目した分析がある。Lee (1978) は、-*i*-系は、主語名詞句の指示対象が、《自動的》に変化することを表すのに対して、-eci 構文は《非自動的》に変化することを表すと指摘している。

- (5) kwulttwuk=i mak-hy-ess-ta (Lee 1978: 35)
 煙突=NOM ふさぐ-i-PST-DEC
 「煙突がふさがった。」
- (6) a. kwulttwuk=i mak-acy-ess-ta (= (3a))
 煙突=NOM ふさぐ-eci-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突がふさがった。」
- b. elumphan wi=ey s(e)-ecy-ess-ta (= (3b))
 氷 上=LOC 立つ-eci-PST-DEC
 「(話し手が、なんとか) 氷の上に立つことができた。」

Lee (1978) によると、(5) は、mak- (ふさぐ) に-*i*-系がついた例であり、kwulttwuk (煙突) がふさがるという事象が行為者の意図的な行為によるものではなく、自然発生的に生じたことを表している。一方、mak- (ふさぐ) に-eci が後接した (6a) は、話し手の行為によって kwulttwuk (煙突) がふさがるという事象が、話し手の望み通りに行われるまでに困難が伴うという意味を表し、(6b) は、話し手の予想に反して elumphan (氷) の上に立つという事象が生じたということを表す。Lee (1978) は、-eci 構文と-*i*-系との間に見られる意味的な違いを、部分的なものに留まるとはいえ、指摘した先駆的な研究ではあるが、-eci が他動詞に後接した (6a) と-eci が意図的な行為を表す自動詞に後接した (6b) との意味的な関連性については十分に示されていない。

円山 (2016) は、-eci 構文の可能用法を (7) のように定義し、(8) ~ (11) の例を《非情物の変化》⁵か《人間の行為》⁶、《一回性可能》⁷か《恒常的可能》⁸かという意味的な特徴にもとづ

⁵ 「基本的に動作の対象の変化に関して述べるもので、動作主は含意的に関与するが、非情物の変化の実現／非実現に焦点が当てられている。」(円山 2016: 54)

⁶ 「動作主は関与しており、その行為の実現／非実現に対して焦点が当てられる。」(円山 2016: 54)

⁷ 「事態は実現済みであり、それについて見込みとの一致／不一致を述べるもの。」(円山 2016: 54)

⁸ 「個々の事態には縛られずに、ある事態が生起しうる(あるいは生起しえない)ことを述べることによって、その物や人が持つ属性を記述するものである。」(円山 2016: 54)

いて分類している。

- (7) 可能用法の定義: 事態の実現に対する見込みの有無や、見込みどおりに実現できたかどうか述べるもの (円山 2016: 52)

- (8) swutong=ulo phail=ul sakceyhaypolyekohani comchelem
手動=INS ファイル=ACC 削除しようとしたら なかなか
ciw(u)-eci-ci.anh-ass-supni-ta (円山 2016: 54-55)

消す-eci-NEG-PST-A.HON-DEC

「手でファイルを削除しようとしたら、なかなか消せませんでした。」

- (9) ku swustol=un nas=i cal kal-aci-n-ta (Kim 2002: 110)
その 砥石=TOP 鎌=NOM よく 研ぐ-eci-PRS-DEC

「その砥石は鎌がよく研げる。」

- (10) tali=ka thwungthwung pwusko taumnal=un sinpal=i sin-ecy-ci.ahn-ass-ta
足=NOM ぱんぱんに 腫れて 次の日=TOP 靴=NOM はく-eci-NEG-PST-DEC
「足がぱんぱんに腫れて翌日は靴がはけなかった。」 (円山 2016: 56)

- (11) say sinpal=ul samyen kipwun=i coh-ta
新しい 靴=ACC 買うと 気分=NOM 良い-DEC
kuliko cengmal cal tally-eci-n-ta (円山 2016: 57)

そして 本当に よく 走る-eci-PRS-DEC

「新しい靴を買うと気分がいい。そして本当によく走れる。」

円山氏は、(8) と (9) は《非情物の変化》に分類されている点で共通するが、《一回性可能》を表すか《恒常的可能》を表すかで異なると指摘している。(8) は、非情物である *phail* (ファイル) が消えないという《事態》が実現しており、それが話し手の見込みと一致していないことから可能の意味が付与されると説明し、(9) は、*swustol* (砥石) を研ぐという《事態》が生起しうることを述べることによって、非情物である *swustol* (砥石) が持つ属性を表すとされる。さらに、(10) と (11) は《人間の行為》に分類されている点で共通するが、《一回性可能》を表すか《恒常的可能》を表すかで異なると指摘している。(10) は、話し手の靴を履く行為が行われないという《事態》が実現しており、それが話し手の見込みと一致していないことから可能の意味が付与されるのに対し、(11) は、行為者の行為が実現しているが、「走れる」という《事態》は *say.sinpal* (新しい靴) という外的な条件が動作の可否を決定する要因となっており、《偶発的》に生じた《事態》を表すとされる⁹。円山氏は可能用法に属する例を以下のように分類している。

⁹ (11) は、話し手の気分が良かったために走れたと解釈することも可能である。この場合は話し手の属性(気分)が行為を可能にする要因だと考えられる。

表 1. 可能用法に属する例の分類

	非情物の変化	人間の行為
一回性可能 時制：過去が典型的 副詞：ようやく、簡単に、なかなか 意味：実現した事態について述べる	(8)	(10)
恒常的可能 時制：非過去 副詞：いつでも、だれでも 意味：属性叙述	(9)	(11)

(円山 2016: 55、例文番号修正)

確かに、《一回性可能》は、(7) で定義されているように、事象の実現に対する見込みの有無と、その見込み通りに実現できたかどうかを表す。また、《人間の行為》と《非情物の変化》の違いによって《一回性可能》をさらに分類することは可能だと考えられる。しかしながら、《非情物の変化》に分類されている(8)であっても行為者の行為が前提になっていると解釈されるため、行為者が関与しているのは《人間の行為》だけではないと思われるし、そもそも2つの意味的特徴が排他的なのかは疑問である。(8)と(9)の意味的な共通性を《非情物の変化》のみに、(10)と(11)の意味的な共有性を《人間の行為》のみに限定する分析も、(8)(9)と(10)(11)の意味的な関係を十分に捉えるものとは言い難い。

3. 使役事象の捉え方の一面としての可能用法—受身用法との意味的關係を中心に

動詞に後接する補助動詞（あるいは助動詞）とされてきた-eci は、形容詞にもっとも自由に後接可能であり、他動詞はそれより強い制約があり、自動詞はもっとも制約が大きい(Park 1998: 155)。通時的にも-eci は形容詞に後接する用法が最も早い時期に成立したと言われている(Ahn and Yap 2017 他)。-eci 構文の基本となる用法を状態変化用法とする分析(Jun 2008)があるのも、このように-eci と形容詞の間にみられる結合の自由さのためだと思われる。一方で、-eci 構文の基本用法は受身用法とだ考えられたり(Bae 1988)、《被動性》が諸用法に共通する意味要素として考えられたりするのは(Kitamura 1999)、他動詞に-eci が後接する場合に、受身用法、非意図用法、可能用法が共通して、動詞の表す行為の被動者（行為の受け手）が主格で標示されるという形態/統辞的な特徴を示すからに他ならない。というのも、これは対格言語において通常受身と考えられる文法現象にみられる特徴だからである。

しかしながら、可能用法と非意図用法には、意図的な行為を表す自動詞に-eci が後接する場合もあり、被動者だけでなく道具/手段も主格で標示される点で受身用法と大きく異なる。このような特徴が、従来の多くの研究において非意図用法や可能用法のような単一の用法の意味記述を超えた、-eci 構文の諸用法の統一的な説明を困難にした最も大きな原因と考えられる。以

下では、*-eci* 構文の可能用法の分析を結合する動詞ごとに分けて行いが、これはあくまで分析上の手続きであり、それぞれの動詞に結合する場合が本質的に異なる意味を持つという立場を取るものではないことに注意されたい。

3.1 〈他動詞+*-eci*〉

通常、受身構文は、他動詞に特定の形式が後接するという形態的な特徴とともに、動詞の表す行為の被動者が主格で標示され、行為者が斜格表現（「ニヨッテ」、*ey.uyhay*（によって）等）で標示されるという統辞的な特徴を持つとされる。*-eci* 構文の受身用法にも同様の文法的な特徴がみられ、韓国語学ではしばしば《受身化》と呼ばれてきた。*-eci* 構文の可能用法（あるいは非意図用法）とされる例の多くも、受身用法と同様に、他動詞に*-eci* が後接し、動詞の表す行為の被動者が主格で標示されるという特徴がみられる。しかしながら、可能用法（あるいは非意図用法）では、受身用法の場合と異なり行為者が明示されない。このことは、受身では、行為者として解釈される *yamata.ey.uyhay*（山田によって）が、(12a) では、(12b) の *khonkhulithu.ey.uyhay*（コンクリートによって）と同じように、*yamata*（山田）を詰めて煙突をふさいだという道具/手段解釈としてのみ解釈されることから裏づけられる。

- (12) a. *kwulttwuk=i yamata=ey.uyhay mak-acy-ess-ta*
 煙突=NOM 山田=によって ふさぐ-*eci*-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突が山田でふさがった。」
- b. *kwulttwuk=i khonkhulithu=ey.uyhay mak-acy-ess-ta*
 煙突=NOM コンクリート=によって ふさぐ-*eci*-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突がコンクリートでふさがった。」

ただし、行為者が明示されないという特徴は、当該事象を引き起こす行為者の不在を意味するわけではない。(12a) と (12b) は、動詞 *mak-*（ふさぐ）の表す行為を行う行為者が必ず存在しているのである (Lee 1978)¹⁰。その際の行為者は典型的には話し手自身であるが、話し手を含む複数人 (31) や総称的な場合 (24) (25) も可能である。

可能用法に行為者が関係しているという特徴は、当該事象が自然発生的に生じたことを表す副詞 *cecello*（自然と）とは共起できないのに対して (13a)、行為者の意図的な行為を表す副詞 *kyewu*（やっと）と共起できることや (14a)、道具/手段や方向を表す *lo*（で/へ）で標示される名詞句 *cileystay.lo*（てこ棒で/てこ棒へ）が道具/手段として解釈される方が自然であることから

¹⁰ 認知文法 (Langacker 2008) では、言語表現の意味は、ある概念内容の喚起と、それに対する特定の仕方での捉え方という 2 つの面からなると考える。動詞が喚起する事象概念のうちのどの部分に焦点を与えるのかも、そうした概念内容に対する捉え方の 1 つに当たる。たとえば、「斜辺」という名詞は、直角三角形の概念を喚起した上で、その一部である直角に向かい合う辺を指し示している。ここで喚起される概念内容をその言語表現の「ベース (base)」といい、差し示された部分を「プロファイル (profile)」という。プロファイルするかしないは言語的に明示されるか否かと関係するが、*-eci* 構文の可能用法（あるいは非意図用法）にみられる行為者が明示されないという特徴は、*-eci* 構文の可能用法が当該事象の成立に関わる行為者と被動者の関係（因果関係）を意味的なベースとし、被動者のみをプロファイルしていることを示唆するものと考えられる。

確かめられる (15a)。これは、当該事象を引き起こす行為者が存在せず、自然発生的に生じたことを表す-i系が、*cecello* (自然と) と共起することが自然であるのに対し (13b)、*kyewu* (やっ) と共起すると不自然であること (14b)、*cileystay.lo* (てこ棒/てこ棒へ) が方向として解釈されること (15b) と好対照をなす (Lee 1978)。

- (13) a. ?kwulttwuk=i cecello mak-acy-ess-ta (Lee 1978: 41) ¹¹
 煙突=NOM 自然と ふさぐ-eci-PST-DEC
 「煙突が自然とふさがった。」
- b. kwulttwuk=i cecello mak-hy-ess-ta (Lee 1978: 41)
 煙突=NOM 自然と ふさぐ-i-PST-DEC
 「煙突が自然とふさがった。」
- (14) a. kwulttwuk=i kyewu mak-acy-ess-ta
 煙突=NOM やっど ふさぐ-eci-PST-DEC
 「(話し手の行為によって) 煙突がやっどふさがった。」
- b. ?kwulttwuk=i kyewu mak-hy-ess-ta
 煙突=NOM やっど ふさぐ-i-PST-DEC
 「煙突はやっどふさがった。」
- (15) a. ku tol=un cileystay=lo mil-ecy-ess-ta (Lee 1978: 37)
 その 石=TOP てこ棒=INS 押す-eci-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) その石はてこ棒で押せた。」
- b. ku tol=un cileystay=lo mil-li-ess-ta (Lee 1978: 37)
 その 石=TOP てこ棒=DRCT 押す-i-PST-DEC
 「その石はてこ棒の方へ押された。」

以上の観察から、受身用法と可能用法は、当該事象を引き起こす行為者の行為が関係する点で共通するが、行為者が明示されるか否かという点で異なることが分かる。また、可能用法は、当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられる。可能用法の意味記述が十分なものであるためには、行為者の行為が存在することと、当該事象が予想外に成立あるいは不成立であったことが、どのように関係するのかを答えなければならない。

まず、受身について簡単に触れておきたい。西村・長谷川 (2016) は、(日英語の) 典型的な受身に関して以下のような分析を与えている。

主語の指示対象 X が (明示されないか付加詞で表される) 他者 Y の (対応する能動構文と共通する動詞が表す) 働きかけの直接の対象になる (ことによって何らか

¹¹ 容認性判断は原著者によるものである。

の変化を被る)、という捉え方を表し、その形式は対応する能動構文に比べて有標である。受動構文の形式面での有標性は、Y を主役にして捉えられ (Y と X をそれぞれ主語と目的語の指示対象とする、真理条件的に等価な他動詞構文を用いて表現され) やすい事態を (Y を差し置いて) X を主役にして捉え直すという、意味の有標性を反映していると考えられる。西村・長谷川 (2016: 299)

田中 (2019) は、以上の分析をふまえ、日本語の受身は、そこに関与する変化概念を適切に規定することによって、《変化》を表す構文として規定しうると論じている。つまり、共通する形式-(r)are-で表現されているにもかかわらず、様々な下位類に分けられてきたが故に共通する意味の存在が捉えられづらくなったことを指摘し、日本語の受身には「主語の指示対象の《変化》」という意味的な共通性があると分析しているわけである。本稿では、韓国語の受身も主語名詞句の指示対象の《変化》を表す構文と考える。ただし、様々な先行研究において、-eci 構文の受身用法は、主語名詞句の指示対象が非情物であり、行為者が不特定の場合が多く、行為者が *eyuyhay* (によって) で標示されるという特徴を持っている点で、主語名詞句の指示対象が有情者で、特定の行為者が *eykey* (に) で標示される-i系の受身とは異なることが指摘されている (Lee and Chae 1999、円山 2016 等)。

次の例は、可能用法に属する例である。

- (16) kwulttwuk=i mak-acy-ess-ta (= (3a))
 煙突=NOM ふさぐ-eci-PST-DEC
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突がふさがった。」

(16) では確かに、受身用法と同様に動詞の表す行為の被動者が主格で標示されており、また、主語名詞句の指示対象に何らかの《変化》が生じたことを表している。しかし、被動者の《変化》それ自体ではなく、行為者 (典型的には話し手) の予想に反して当該事象 (「煙突がふさがる」) の成立が困難だったということを前提に、被動者 *kwulttwuk* (煙突) が当該事象の成立を困難にする属性を持つことを表す文となっている。話し手の予想に反して事象が成立したという解釈は、次の例を比較することで確かめられる。

- (17) a. ??kkochpyeng=i theyipul wi=ey cal noh-acy-ess-ta¹²
 花瓶=NOM テーブル 上=LOC 上手に 置く-eci-PST-DEC
 「花瓶がテーブルの上に上手に置かれた。」
 b. phayngi=ka theyipul wi=ey cal noh-acy-ess-ta
 コマ=NOM テーブル 上=LOC 上手に 置く-eci-PST-DEC
 「コマがテーブルの上に上手に立てられた。」

¹² 可能用法としては不自然であるが、受身用法としては自然である。

(17a) では、テーブルの上に花瓶を置くことは日常的な行為であり、成否にかんする予測を含みづらいために可能用法としては不自然である¹³。一方で、(17b) では、コマをテーブルに立てる際には通常、成否に関する予測が行われるために可能用法として自然である。すなわち、当該事象の成立が予想外に困難あるいは容易であることが、可能用法の成立条件の1つと考えられる (cf. 吉村 1995; 第5章、本多 2008)。このような意味的な制約は受身用法には見られないものである¹⁴。

可能用法と受身用法の間にみられる意味の違いは、当該事象の結果状態が続いていることを表す未完了形-*e.iss*-と共起するかどうかという点から裏づけられる (cf. 高 2011)。

- (18) pap=i imi mantul-**ecy-e.iss-ess-ta**
 ご飯=NOM もう 作る-**eci-IPFV-PST-DEC**
 「ご飯がもう作られていた。」

- (19) ??kwulttwuk=i mak-**acy-e.iss-ess-ta**
 煙突=NOM ふさぐ-**eci-IPFV-PST-DEC**
 「(話し手の行為によって、なんとか) 煙突がふさがっていた。」

受身用法は未完了形と共起できるのに対して、可能用法は共起できないのは、両用法が、行為者の行為による主語名詞句の指示対象の《変化》を表すか、当該事象の成立（とそれを可能にする行為者の行為）を可能にする被動者の属性を表すかという点で異なるからに他ならない。受身用法は、主語名詞句の指示対象の《変化》を表すため、未完了形-*e.iss*-が後接されて変化した結果の継続を表す一方で、可能用法は、現実世界において何らかの変化が生じた（あるいは生じなかった）としても、行為者の行為を実行可能あるいは不可能にするような被動者の属性を表すため、ある状態が続いていることを表す非完了形-*e.iss*-と共起すると不自然になるのだと考えられる。

-*eci* 構文の可能用法には、主語名詞句の指示対象として被動者だけでなく道具も現れる。

- (20) i pheyn cal ss(u)-**eci-tela**
 この ペン よく 書く-**eci-PST.MIR.DEC**
 「このペン、よく書けたよ。」

¹³ もちろん、花瓶が通常の形状と異なり、テーブルの上に置くことが容易ではない場合には自然である。

¹⁴ -*eci* 構文には、受身用法と可能用法で曖昧な文も存在する。

- (a) cip=i hantalmaney ci(s)-**ecy-ess-ta**
 家=NOM 1ヶ月で 建てる-**eci-PST-DEC**
 「家が1ヶ月で建てられた。/家を(たった) 1ヶ月で建てることできた。」

この例は、行為者の行為によって元々存在しない *cip* (家) が建てられたという解釈では受身用法と考えられ、普段は建築に半年以上かかるであろう家が、話し手の予想に反してたった1ヶ月で建てられたという解釈では可能用法と考えられる。

- (21) i chaykhal yalpkey ssel-eci-tela
 この スライサー 薄く 切る-eci-PST.MIR.DEC
 「このスライサー、薄く切れたよ。」

(20) と (21) は、それぞれ「何かを書く」や「何かを切る」という事象が容易に成立すること、当該事象と直接に関わる参与者である道具 *phey*n (ペン) や *chaykhal* (スライサー) の属性によって行為者の行為が実行可能となっていることを表している。主語名詞句の指示対象が被動者ではないが、当該事象を引き起こすような行為者の行為を可能にする参与者の属性を表している点で被動者の場合と同じである。ここでは、話し手の行為が容易に成立する要因を、被動者だけでなく成立した事象と直接にかかわるであろう道具の属性に帰属させ、その属性が行為を実行可能にしたと捉え直す過程が働いていると考えられる。

DeLancey (1990) は、通常想定される、行為者の行為が始発点となるような行為連鎖 (causal chain) [行為者→被動者] とは異なり、行為の前に意図 (の発生) がおかれた [意図→行為者→被動者] のような因果連鎖を設定している (坪井 2004 参照)。可能用法に関する以上の分析が正しければ、DeLancey が設定した行為連鎖における意図 (の発生) と同様に、当該事象を成立させる行為者の行為を可能にする参与者の属性も通常の行為連鎖の前におかれ、[属性→行為者→被動者] のような展開を設定することが可能と考えられる¹⁵。当然のことながら、「属性」が行為の前におかれる因果連鎖が考えられるのは、道具を用いた被動者に対する行為者の意図的な行為と被動者の《変化》を表すという通常の因果連鎖があつてのことである。

-eci 構文の可能用法は、当該事象の成立における容易さあるいは困難さだけでなく、話し手の行為が実行されず事象が成立しないことも表す。

- (22) phail=i comchelem ciw(u)-eci-ci.anh-ass-ta
 ファイル=NOM なかなか 消す-eci-NEG-PST-DEC
 「ファイルがなかなか消せなかった。」
- (23) i chaykhal cal anh ssel-eci-tela
 この スライサー なかなか NEG- 切る-eci-PST.MIR.DEC
 「このスライサー、なかなか切れなかったよ。」

(22) は、*ciwu-* (消す) の表す行為が実行できなかったこと、すなわち「ファイルを消す」という事象の不成立および、その行為を不可能にする被動者の属性を表している。(23) は、*ssel-* (切る) という動詞の表す行為が実行できなかったこと、すなわち「何かを切る」という事象が不成立であること、および、*ssel-* (切る) という行為を不可能にする *chaykhal* (スライサー) の属

¹⁵ [行為者→(道具→)被動者] のような事象の展開の中に、多くの場合には行為者の意図であり、時には被動者や道具の属性であるような、通常意識されないそれを起動する機縁となるものがあり、それら (話し手の意図、被動者や道具の属性) をまとめて呼ぶなら「行為起動の機縁」とも言えるかもしれない。この点については坪井栄治郎氏の指摘による。

いう行為を可能にするような、行為者自身の属性を表す¹⁷。ただし、意図的な行為を表す自動詞 *se-* (立つ) が表す事象では、他動詞と異なり行為者と被動者という別々の参加者が存在するわけではない。(26) では、話し手自身を行為者と被動者という異なる二者として再分析し、他動詞の表す行為者と被動者という2つの参加者からなる事象として捉え直しているのである。そのため、当該事象が話し手自身の属性(能力)によって成立することを表すことができる。

話し手の属性によるものという意味的な特徴は、以下のような例を対比することで明確にすることができる。

- (27) a. *khentisyen=i* *an* *cohase* *cengsang=kkaci=nun*
 コンディション=NOM NEG 良くて 頂上=LOC=TOP
 an *ollak(a)-acy-ess-ta*
 NEG 登る-eci-PST-DEC
 「コンディションが良なくて、(話し手が) 頂上までは登れなかった。」
- b. *??nalssi=ka* *an* *cohase* *cengsang=kkaci=nun* *an* *ollak(a)-acy-ess-ta*
 天気=NOM NEG 良くて 頂上=LOC=TOP NEG 登る-eci-PST-DEC
 「天気が良なくて、(話し手が) 頂上までは登れなかった。」
- (28) *nalssi=ka* *an* *cohase* *cengsang=kkaci=nun* *ollaka-l.swu.eps-ess-ta*
 天気=NOM NEG 良くて 頂上=LOC=TOP 登る-POT-PST-DEC
 「(話し手が) 天気が良なくて、頂上までは登ることができなかった。」

(27a) と (27b) は、ともに、話し手が山の頂上までは到達しなかったという事象の不成立を表すが、当該事象の不成立を話し手の属性(能力)によるものとした (27a) は自然であるのに対して、天気悪さという外的な要因によるものとした (27b) は容認されない¹⁸。(27b) で意図されていた意味を表すには (28) のように可能表現 *(u)l.swu.eps-* (することができない) を用いなければならないのである。すでに述べたように、可能用法は、通常の行為連鎖の始発点である行為者の前に、その行為を可能にするような参加者の属性を置くものと考えられるが、そのような考え方を当てはめると、(27b) が不自然なのは、当該事象の成立あるいは不成立を決めるのが事象内の参加者の属性ではなく事象が起きる場の属性だからだと考えられる。

意図的な行為を表す自動詞の場合も、行為者の行為を可能にするような道具/手段の属性を表す場合がある。

¹⁷ (10) は、意図的な行為を表す自動詞ではないが、話し手自身の足が腫れて靴が履けないということから、(27a) と同じく、話し手の属性による事象の不成立を表すと考えられる。

¹⁸ (27b) は非意図用法なら容認可能である。つまり、話し手が十分気をつければ「頂上まで登る」という行為を行うことができたのにそうしなかった(すなわち、不作為を行う)ことから典型的な行為者と同じように責任が帰せられ、典型的な使役事象を表す「受身」と同様に、*-eci* 構文が用いられていると考えられる。非意図用法の詳細な意味記述については別稿に譲りたい。

- (29) *thayksi=lul thase hakkyo=kkaci 30pwun=maney k(a)-acy-ess-ta*
 タクシー=ACC 乗ったので 学校=LOC 30分=で 行く-eci-PST-DEC
 「タクシーに乗ったので、学校まで30分で行けた。」
- (30) *thayksi=lul thase hakkyo=kkaci 30pwun=maney k(a)-lswu.iss-ess-ta*
 タクシー=ACC 乗ったので 学校=LOC 30分=で 行く-POT-PST-DEC
 「タクシーに乗ったので、学校まで30分で行くことができた。」

(29) は、普段は、学校まで30分で着くことはむずかしいという前提があるときに用いられ、タクシーに乗ったことで普段より早く着き、当該事象が容易に成立したことは、*thayksi* (タクシー) という道具/手段の持つ属性によるものであることを表す。しばしば、(29) のような可能用法は、(30) のような可能表現-(*u*)*lswu.iss/eps-* (することができる/できない) に置き換えられると指摘されてきた (円山 2006、Bak 2007)。しかし、(30) のような可能表現は、普段は学校まで30分では行くことができないという前提がなくても用いることができる。すなわち、当該事象の容易な成立を表すことはできず、当該事象の生じる可能性を語っているのみである点で、可能用法と大きく異なるのである。

また、意図的な行為を表す自動詞の場合は、行為者の行為を可能するような場所の属性を表す場合もある。

- (31) *ku pang=ey yelmyeng=ina c(a)-acy-ess-ta* (Lee 1978: 53)
 その 部屋=LOC 10人=も 寝る-eci-PST-DEC
 「その部屋で (話し手を含む) 10人も寝られた。」

(31) は、「10人がある部屋で寝る」という事象の成立が困難だったことを前提に、行為者の *ca-* (寝る) という行為を可能にするような *pang* (部屋) の属性を表す。*-eci* 構文の可能用法では、行為者の行為を可能あるいは不可能にするようなものとして、被動者以外には道具/手段や場所しか取れないのは、事象の成立に直接に関わるものとして、(行為者を除けば) 被動者や道具/手段、その行為が行われる場所以外は典型的だとはみなされないからであろう。

これまでの分析にもとづき-eci 構文の可能用法を、次のように規定することができる。

- (32) 当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられ、予想に反する事象展開の原因となる対象の属性を語るもの。

4. 他言語の対応する構文

円山 (2007) では、円山 (2006) で《制御性》¹⁹という概念を用いて-eci 構文の可能用法と類

¹⁹ 「動作主の意志どおりに動作や状況をコントロールできるかどうか」 (円山 2006: 69)

似表現-(u)lssu.iss/eps- (することができる/できない) との異同を示した分析と、日本語東北方言の-rasar 構文と韓国語の-eci 構文が対応する可能性について言及した高田 (2006) をふまえ、韓国語の-eci 構文の可能用法と北海道方言の-rasar 構文が《一制御》の状況に限って使われることを指摘している。

- (33) a. この靴は小さすぎてはかさない。 (円山 2007: 58)
 b. *この靴はデザインがかっこ悪くてはかさない。 (円山 2007: 58)
- (34) a. i kwutwu=nun nemwu cakase sin-eci-ci.anh-nun-ta (円山 2007: 60)
 この 靴=TOP あまりに 小さくて はく-eci-NEG-PRS-DEC
 「この靴は小さすぎてはけない。」
- b. *i kwutwu=nun ticain=i chonsulewese sin-eci-ci.anh-nun-ta
 この 靴=TOP デザイン=NOM かっこ悪くて はく-eci-NEG-PRS-DEC
 「この靴はデザインがかっこ悪くてはけない。」 (円山 2007: 60)

円山 (2007) の《制御性》を用いた分析は、(33a) が、行為者の行為を可能にするような話し手の属性を表す場合には容認可能で、(33b) のように、外的な要因による場合には容認不可能であるという分析と一致する。ただし、《制御性》という概念は、他言語の対応する構文を適切に捉えることができないという点で不備があるものである。

氏家 (2016) では、北海道方言の-rasar 構文が、中間態の様々な捉え方の 1 つであると指摘し、英語の中間構文と-rasar 構文が対応する構文であることを示している。

- (35) This knife cuts well. (Yoshimura 1990: 497)
 (36) このペンをよく書かざる。 (佐々木 2015: 163)

氏家 (2016: 275) は、両構文はともに「主語名詞句の指示対象が(語幹の) 動詞の表す行為の成否を決定するような属性を持つものであることを表す」という点で意味的に類似し、被動者だけでなく道具主語が可能である点や難易を表す副詞と共起しやすいという点で類似していることを指摘している。氏家氏のいう英語の中間構文と北海道方言-rasar 構文に共通して見られる意味的特徴は、3 節で述べてきた-eci 構文の可能用法にも見られるものである。つまり、言語ごとに用いられる形式は異なるものの、韓国語の-eci 構文の可能用法は、英語の中間構文や北海道方言の-rasar 構文の一部の用法と、事象の成立あるいは不成立と関わる行為者の行為を可能あるいは不可能にするようなものの属性を語るものという意味的な共通点を持つのである。

また、本多 (2008) では、(37) のような日本語の《無標識可能表現》を、英語の中間構文との関連で再検討し、可能表現の本質的特徴を (38) のようにまとめている。

- (37) a. あげようとしても、手があがらない。 (大崎 2005: 197)
 b. 銅版は簡単に曲がる。 (影山 1998: 80)
- (38) a. 可能表現とは、話し手が行為の成否や進み具合に関して原因推測を行なっていることを示す表現である。
 b. 容易・順調に成立・進行した行為は、出来事把握の一面性により、「当たり前」とされて当事者の特段の注意を引かないことが多い。
 c. 〈成立が当たり前でない事態〉〈完遂が容易でない行為〉は、出来事把握の一面性により、当事者の注意を引き、「なぜ成立が困難なのか」「なぜ完遂が容易でないのか」という当事者による推測（原因推測）が起動される。ここから、可能表現に見られる制約が説明される。 (本多 2008: 84)

《無標識可能表現》は、-eci 構文や-rasar 構文のような標示こそもないものの、-eci 構文や-rasar 構文の成立条件が (38) にみられる意味的な制約と関連しており、-eci 構文は、英語の中間構文や北海道方言の-rasar 構文に加えて《無標識可能表現》と意味的に関連していることが分かる。

5. おわりに

本稿では、使役事象の捉え方 (construal) という考え方に注目し、韓国語の-eci 構文の可能用法は、当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられ、予想に反する事象展開の原因となる対象の属性を語るものであることを示した。この点で-eci 構文の可能用法は、行為者の行為によって被動者に何らかの《変化》が生じたことを表す受身用法と異なる。

本稿は、韓国語の-eci 構文が表す、使役事象に対する多面的な捉え方（当該事象に関わる被動者に生じた《変化》を表すか、予想に反した当該事象を引き起こしたものの属性を表すか）の一端を明らかにした。これは、-eci 構文の他の用法（非意図用法、状態変化）との統一的な分析の可能性を開くものである。

参考文献

- Ahn, Mi-kyung and Foong Ha Yap. (2017) From middle to passive - A diachronic analysis of Korean -eci constructions. *Diachronica*. 34-4. 437-469.
- Bae, Hee-Im. (배희임) (1988) 『국어피동연구』 서울: 고대민족문화연구소출판부. (『国語被動研究』高麗大学校民俗文化研究所出版部)
- Bak, Jae-yeon. (박재연) (2007) 「보조용언 구성 ‘-어지-’의 양태 의미에 대하여」 『국어학』 50: 269-293. (「補助用言構成-eci の様態意味について」『国語学』)
- DeLancey, Scott. (1990) Ergativity and the cognitive model of event structure in Lhasa Tibetan. *Cognitive Linguistics* 1: 289-321.

- 本多啓 (2008) 「現代日本語における無標識の可能表現について」『研究会報告書 動的システム情報論 (7)』81-90. 統計数理研究所.
- Jun, Young-chul. (전영철) (2008) 「소위 이중피동문에 대하여」『언어학』52: 79-101. (「いわゆる二重被動文について」『言語学』)
- 影山太郎 (1998) 「日本語と英語」玉村 (編)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』58-83. 世界思想社.
- Kim, Young-tae. (김영태) (2002) 『현대국어 보조용언 연구』대구: 문창사. (『現代国語の補助用言の研究』)
- Kitamura, Tadashi. (기타무라 타다시) (1999) 「보조동사 ‘(어)지다’의 의미」『국어교육』100. 한국어교육학회. 328-355. (「補助動詞-*eci* の意味」『国語教育』韓国語教育学会)
- 高恩淑 (2011) 「補助動詞“-지다”が表す〈可能〉と〈自発〉について」『日語日文学』50: 5-20. 大韓日語日文学会.
- 高恩淑 (2015) 『日本語と韓国語における可能表現—可能形式を文末述語とする表現を中心に—』東京: ココ出版.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lee, Ik-seop and Chae, wan. (이익섭 · 채완) (1999) 『국어문법론강의』서울: 학연사. (『国語文法論講義』)
- Lee, Jung-tag. (이정택) (2004) 『현대 국어 피동 연구』서울: 박이정. (『現代国語被動研究』)
- Lee, Kee-dong. (이기동) (1978) 「조동사 ‘지다’의 의미 연구」『한글』161: 29-61. (「助動詞 *cita* の意味研究」『ハングル』)
- Lee, Kee-dong. (1993) *A Korean Grammar —On Semantic-Pragmatic Principles—*. 한국문화사.
- 円山拓子 (2006) 「補助動詞지다 *jida* が表す「可能」の意味分析」研究代表者 生越直樹『日本語と朝鮮語の対照研究』63-76. 東京大学 21 世紀 COE プログラム 「心とことば—進化認知科学的展開」研究報告書.
- 円山拓子 (2007) 「自発と可能の対照研究—日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語 *cita*—」『日本語文法』7(1): 52-68.
- 円山拓子 (2016) 『韓国語 *cita* と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京: ひつじ書房.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹 (著) 『構文と事象構造』107-203. 東京: 研究社.
- 西村義樹・長谷川明香 (2016) 「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点—」藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』282-307. 東京: 開拓社.
- 大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法』5(1): 196-211.
- Park, Hye-jin. (박혜진) (2017) 『‘-어지다’의 의미 기능 연구』연세대학교석사학위논문. (『-*ecita*

の意味機能研究』延世大学校修士学位論文)

- Park, Jin-ho. (박진호) (1998) 「보조용언」 『문법연구와 자료』 139-164. 서울: 태학사. (「補助用言」『文法研究と資料』)
- 佐々木冠 (2015) 「北海道方言における形態的逆使役の類型論的位置づけ」中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦(編)『認知類型論』 163-211. 東京: くろしお出版.
- Shibatani, Masayoshi. (2006) On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics*. 44: 217-269.
- Son, Se-mo-dol. (손세모돌) (1996) 『국어 보조용언 연구』 서울: 한국문화사. (『国語補助用言研究』)
- 高田祥司 (2006) 「日本語東北方言と韓国語の対照研究の可能性 (研究ノート)」『日本語文法』 6(2): 116-125.
- 田中太一 (2019) 「日本語受身文を捉えなおす」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を紡ぐ』 343-365. 東京: くろしお出版.
- 坪井栄治郎 (2004) 「述語をめぐる文法と意味—認知言語学的観点から—」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 235-256. 東京: 朝倉書店.
- 氏家啓吾 (2016) 「北海道方言-rasar 構文の表す捉え方-認知文法の視点から-」『東京大学言語学論集』 37: 261-279. 東京大学人文社会研究科言語学研究室.
- Woo, In-hyey. (우인혜) (1997) 『우리말 피동 연구』 서울: 한국문화사. (『国語被動研究』)
- Yoshimura, Kimihiro. (1990) 「A study of verbs in the active-passive constructions」『ことばの饗宴—うたげ 笥壽雄教授還暦記念論集』 .495-512. 東京: くろしお出版.
- 吉村公宏 (1995) 『認知意味論の方法—経験と動機の言語学—』 京都: 人文書院.

An Attempt at a Causative Analysis of the *-eci* Construction of Korean

Woojin JEONG
woojin3229@gmail.com

Keywords: Korean, *-eci* construction, causative event, construal, potential

Abstract

Korean has a construction involving the productive verb suffix *-eci*, which is commonly viewed as having four main uses: passive, unintentional, potential, change of state. This paper argues, focusing on its causative construability, that the *-eci* construction can be analyzed as one which expresses the attribute of the participant of the event that enables its occurrence.

(ちょん・うじん 東京大学大学院)